

第26回 「ことば」フォーラム

ことばと国際理解
— 国際理解につながることばの教育 —

2005年7月30日（土）

武蔵野スイングビル

氏原基余司（文化庁国語課）

野山 広（国立国語研究所）

松本 茂（東海大学教育研究所）

杉戸 清樹（国立国語研究所）

山西 優二（早稲田大学）

共催：武蔵野市国際交流協会

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（山田 貞雄） 「ことばと国際理解－国際理解につながることばの教育－」を始め
ます。最初に国立国語研究所所長、杉戸清樹より御挨拶^{あいさつ}を申し上げます。

杉戸 大勢のご参加、ありがとうございます。今日の夕方は雷が鳴るかもしれないと思
いますが、昨日よりは暑くなくて何よりだったと思います。今日のこの会は、私ども国立
国語研究所の主催で、武蔵野市国際交流協会の共催事業として開かせていただくもので
す。27日から昨日までの3日間、武蔵野市国際交流協会の「夏の教員ワークショップ」
というのが開かれていました。今日は4日目にあたるわけですが、その中の特別企画、
「オープンフォーラム」という名前が付いていますが、そういう位置づけもいただいて
開かせていただきます。私ども国立国語研究所は、文部省の研究機関として昭和23年に
発足しました。創立後56年ちょっと経っています。今年の2月からは、多摩地区の立川
市に全面移転しました。それまでは都内の北区にありましたが、そちらから引っ越して
参りまして、多摩地区での研究活動を始めたところです。その活動の中で、国語研究所
はこの5～6年、毎年5回か6回ずつ、「ことば」フォーラムという名前の催しを開いて
きています。言葉の研究、言葉の教育の専門家の方たちだけではなくて、一般の市民の
皆さんにも向けて、例えば研究所の研究の成果とか、言葉や日本語についての話題をそ
の都度テーマを選んで、講演、シンポジウム、展示を見ていただくといういろいろな形
で発表し、情報交換の機会を設けてきています。「フォーラム」とはカタカナの言葉です
が、「広場」とか「人が集まる場所」という意味を込めて、文字通りいろいろな立場の方々
に集まっていただき、そこで言葉に関する事柄、言葉をめぐって気楽に自由に意見を交
換していただく、情報を得ていただく機会としてきています。先ほど申しました
ように、今回は武蔵野市の国際交流協会の御理解がいただけまして、共催という御協力
をいただいて開くことができました。この場ですが協会の皆さんにあらためて御礼申し
上げます。ありがとうございます。本日のテーマは、先ほど紹介しました「ことばと国
際理解」というものです。後ほど詳しい内容、企画は御説明します。私ども国語研究所
でも、30年ほど前から、外国人で日本語を勉強する人が増え、その人たちを支援する日
本語教育とか、日本語の学習支援に関係する研究、研修の授業を続けてきています。そ
のような領域で、今日はテーマを選んで講演とかディスカッションを予定しています。
3日間のワークショップの中の特別企画ですが、昨日までのワークショップの全体の成
果に、一枚厚みを加えることができると願っています。後ほどご紹介しますが、文化

庁から氏原さん, 東海大学の松本さんが講演して下さい, 討論にも参加して下さいます。
それから早稲田大学の山西さんもコメントを寄せて下さいます。お三方ありがとうございます。
どうぞよろしくお願いいたします。夕方まで2時間半ほどの時間ですが, 御参加の皆さんにとって, それぞれのお立場でそれぞれのお土産と申しますか, 新しい情報をお持ち帰りいただける時間となることを期待しています。御質問, 御意見をお出しただく時間も準備していますので, どうぞ積極的に御発言, 御参加下さいますよう, よろしくお願い致します。以上, ごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

野山 皆さんこんにちは。私は後で発表もさせていただきます国立国語研究所の野山です。ここで今日の趣旨説明をさせていただきたいと思います。資料の中で「ことばフォーラムの趣旨」と書かれていて, 「言語生活」と書いた関連図の載っているA4の紙がお手元にございますか? 見当たらない方がいらっしゃったら手を挙げていただければと思いますが, 大丈夫でしょうか? この「ことばフォーラムの趣旨」に関しては, 杉戸所長から話がありましたように, 本来国語研究所の行っている調査研究とか, 今の時代を反映した言葉の問題に関してフォーラムを開催することで, 言葉とか言語教育とか言語環境, 言語生活等に関する理解を促進するために開いているものです。御存知の方は御存知で, 全く知らない方は知らないわけですが, 多摩地区の立川の高松という所に国語研究所が移転して2回目のフォーラムです。まだご存知ない方はぜひ知って, おいでいただきたいと思いますし, 今日の言葉の教育の問題をいろいろ感じていただいて, 国語研究所がやっていることにぜひ理解を深めていただければありがたいです。今回のフォーラムの趣旨に関しては, 国語と日本語, 外国語としては英語を取り上げていますが, そういった教育に関する問題を, 国際理解の促進という観点から総合的に考えてみることにしました。前半の3日間は, 武蔵野市国際交流協会でも東京都内の先生方を中心に全国から集まった方々が参加する教員ワークショップが開かれていました。今日は, 国際理解という観点で国語, 日本語, 英語の問題をとらえて議論してみようではないかということで, まず国語に関しては, 「これからの時代に求められる国語力について」, 文化庁の氏原さんが御説明して下さいます。それから日本語教育の立場で, 私が「日本語教育の可能性と醍醐味^{だいご}」についてお話しをさせていただきます。次に英語教育の立場およびコミュニケーションという観点も含めてですが, 「国際理解のための英語教育」というテーマで, 松本さんが説明をして下さいます。それを受ける形で社会言語学とか, 先ほど出ました

ように言語生活研究の観点から、杉戸所長がコメントをします。そして、最後に、前半の3日間のワークショップ全体の企画およびコーディネートにかかわってこられた山西さんが、国際理解を教育の観点からコメントをさせていただきます。これらのコメントも含めて議論の時間を少しとり、最終的に今後の言語、言葉の教育のあり方について展望する時間を持ちたいと思います。資料の11ページに野山作成の図があります。何となく話を聞いただけではイメージしにくいと思われましたので、資料の中身を見ながら、こういうイメージで言語生活を支えるものはどのように動いているか、あるいはどう支え合っているのかを考えた場合の想定図とさせていただければ幸いです。この図を見て、質問とか御意見とかあれば、また休憩の時間などに聞いていただければと思います。このような流れでいきたいと思います。それでは早速ですが、最初の発表者、文化庁国語課の主任国語調査官であります、氏原さんにお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願い致します。

【国語教育の立場から】氏原 基余司

(配布資料：p. 3～7)

氏原 文化庁国語課の氏原です。これから少しお話しさせていただきたいと思います。よろしくお願い致します。この冊子、今見ますとまだ余裕があるようです。これをお持ちでない方は、今日のお土産の一つとして、ぜひお持ち帰りいただきたいと思います。全部で140冊あります。最初から180冊くらいあれば、皆さんに資料として事前にお配りしたいと思っていたのですが、人数からいって足りなさそうだとということで、このような形で配布させていただきました。たまたま、これから冊子を増刷することになっていきますので、もしさらに必要だということであれば、国語課の方に問い合わせさせていただきたいと思います。話の中身としては、私のレジュメを見ていただければ分かるようにお話ししたいと思います。今日はこの答申の考え方を中心にお話します。私は国語教育の立場からということです。国語教育というのは、教科教育の場合は「国語科教育」といっているわけです。さらに、言葉にかかわる教育全体を、教科としては国語科を含み込んでもっと広い立場でとらえて、「国語教育」といっているわけです。答申の中では、言葉にかかわる教育の全体という意味で国語教育という言葉を使い、教科としての「国語」で教えている国語科教育というものと分けて扱っています。ですから大きな国語教育の中に、国語科教育が入っているというふうになるわけです。私の紹介はここに書いてありますが、都立高校の教員をやっていました。最初のところで「自分の教員経験も踏

まえながら」ということが書いてあります。最初にお話ししたいと思うのですが、国語科教育で何をやったのかというのは、なかなか見えにくいのです。ご自分で国語の時間にどんなことを学んできたか、どんなことをやったのか、なかなか思い出しにくいのではないのでしょうか。非常に素晴らしい先生にあたったという方は、「本当にいい教育を受けた」と思うかもしれませんが、一般的にはなかなか分かりにくい。国語科教育の非常に難しい点の一つは、我々は、普段日常生活で言葉を使っていますが、それと教科内容が地続きになっていることにあると思っています。ですから、そういう地続きの中で行われる国語科教育というのは一体何なのかというのが、非常に見えにくいのです。これが例えば算数とか数学だと、今まで足し算ができなかったのができるようになった、あるいは割り算ができなかったのができるようになった、これは非常に分かりやすいですね。具体的に何を習ったのか、そしてその結果、何ができるようになったのかというのが非常に見えやすいのですが、国語科教育の場合はどうもそういうわけにはいかないのです。私が現場にいたときに、新しい1年生が入ってくると必ず聞いていたことがあります。「中学校のときに、国語というのは答えがない、あるいは正解がないものだというようなことを聞いた人は、手を挙げて下さい」という質問です。そうすると、ほとんどの子供が手を挙げます。国語というのは正しい答えがないのだ。これは「当然だろうな」と思う人もいるかもしれませんが、いかがでしょうか。皆さんもそういったことを聞いたことはないですか。私はそのときに「非常に罪な話だな」と思いながら、手を挙げてもらっていたのです。私は、新入生が入ってきたときに最初に「国語は正解があるんだ」という話からします。中学校のときの先生方が「正解がないんだ」と言う気持ちは非常に分かるのです。つまり「自由に意見を言ってごらん」とか、「どういう感じ方をするのはそれぞれ自由なのだから」という意味合いで言っていることは非常によく分かります。ただ、そもそも国語には正解がないという話になると、勉強する気になるかどうかという話になります。正解のないものをどうやって勉強するのかです。そしてもう一つ、非常に問題だなと思うのは、そういう善意の発言であるにもかかわらず、結果的にそのことは子供にしてみるとある意味、常に裏切られていくわけです。なぜかと言えば、必ずテストというものがあって、そのときに「これについてはどうなのか」ということを書いたり選んだりするわけですが、そうすると×がついてきたりするわけです。「正解がないのだったらみんな○でもいいんじゃないか」と思うわけですが、そういうときにはしっかり×がつくのです。そうなるとうますます、ある面でいうと混乱してくるわけです。

私は、最初の授業のときに「今日は晴れている」という文を大きく板書するということを、ある時期、ずっとやっていました。「今日は晴れている」という文があれば、当然文というのは情報を持っています。「今日は晴れている」という文であれば、「晴れている」ということをしっかり情報として受け取らなくてははいけません。ですから「今日は晴れている」という文があるのにもかかわらず、勝手に雨が降っていると思ったり、あるいは曇っていると思っていたりすると、これは明らかな間違いです。文というのは必ずある情報があって、その情報をしっかりと受け止めるということが必要なわけです。

「今日は晴れている」という文があったときに、「天候として晴れている」という情報がきちんと受け取れなければ、それは文の読み方としてまずいわけです。そこにおいては、正解が明確にあるわけです。「曇っている」と受け取ったり、「雨が降っている」と受け取ったり、勝手に「台風が来ている」と受け取ったりしていると、まずいわけです。ただし、「今日は晴れている」という文があった後に、「今日は晴れているから暖かい」と思うのか、あるいは「今日は晴れているけれども寒い」と思うのか、そこは書いてないので「今日は晴れている」という文からだけでは分からないですよ。そうすると、「今日は晴れている」という文があったときに、それが「今日は晴れているから暖かい」と思うのか、あるいは「今日は晴れているけれども寒い」と思うのかというところ、その情報を受け取った上で、「晴れているけれども寒い」と思うのか、「晴れているから暖かい」と思うのかというところは、自由にその人が受け取ることのできる範囲ですよ。ですから、情報を受け取った上でそれに基づいて自分がどう考えていくのかというところは、確かに正解がないのです。だからこれから勉強していくにあたって、正解がある部分、きちんと受け取らないといけない部分と、それに基づいて自分がどう考えていくのか、自由に発想していい部分とを分けて考えていこうよという話を最初にします。

「今日は晴れている」という文があっても、文章というのは文が重なっていくわけですから、ずっと読んでいくとどこかのところに、例えば「いつもより1枚余計に着て外に出て行った」ということが、もしかしたらでてくるかもしれない。そうすると、その段階で、「今日は晴れている」という情報と、「いつもより1枚余計に着て外に出て行った」という情報があるとすれば、それはおそらく寒いからですよ。そうするとその情報も新たに加わってきますから、「晴れていて、おそらく普通の日よりは寒い日であったのだろう」ということが分かってきます。文章というのは、そういうように文が積み重なっていくと、きちんと受け取らないといけない部分がだんだん多くなっていくのです。そ

ういうものをしっかりと区別していこうという話を最初にしました。国語科教育の問題点の一つは、今申し上げたように、子供にとって何をやっているのかがよく分からないのです。先生のほうも「自由に感じればいい」と言いながら、一方でテストがあって、また〇×がしっかりとついてくるという世界ですから、子供からすると「正解がないのにもかかわらず、なぜこういうふうになってくるんだらう」ということになりがちです。しかも厄介なことに、日常生活の中で言葉を使っているという現実がありますので、非常に分かりにくい世界になっているわけです。そういうような問題点も踏まえて、この文化審議会答申が出たわけです。国語科教育では何が一番重要な点だろうかという、やはり「国語力」をしっかりとつけるということだと思います。その場合の国語力とは一体何だろうかという問題になるのですが、それはこのレジュメの私のページを見ていただきたいと思います。最初のところを見ていただくと、第2のところ、「これからの時代に求められる国語力」、ここがなぜ重要なのかというのは1番に書いてあります。「個人にとっての国語」、「社会全体にとっての国語」、「社会変化への対応と国語」ということで、知的活動の基盤、個人にとっての国語のところです。つまり、我々は言葉を使ってしかものを考えることができないということがあります。算数であれば足し算ができるようになった、割り算ができるようになったと言いましたが、足し算の $1 + 1 = 2$ 、これもおそらく多くの方は「1足す1は2」と言語化して理解しているはずですが。理科であっても社会であっても言葉を使って理解します。そういう知的活動は言語の助けを借りないと、ほとんど我々は認識できないのです。そういうふうと考えていくと、国語力の構造というのはそこにありますように、「考える力、感じる力、想像する力、表す力」、二つ目にそれを支えている「国語の知識」や「教養、価値観、感性等」、の二重構造になっていくわけです。これを図にしたものが、何ページか先を見ていくと出てきます。冊子の中には折り込みでもっと大きなモデル図が入っていますので、これも併せてご覧ください。その図を見ていただいて、国語力というものをこんなふうにとらえていこうということです。考える力、感じる力、想像する力、表す力、そしてそれを支えている、その下にある、考える力、感じる力、想像する力、表す力の基盤となる国語の知識。これは漢字や語彙、文法などに対する知識などということで、人の話を聞いてもその人の用いている言葉の意味が分からなければ、当然、何を言っているのか理解ができません。ですからどんなに考えようと思っても、材料として一定の語彙の蓄積がないと理解できないところがあります。必ず考えるとか感じるとか想像するとか表す、自分で表すわけ

ですから表現するわけですが、このときにも言葉を使って表現するわけですから、一定の語彙がないとこういった能力が能力として働かないのです。さらにその下を見ていただくと、生涯を通じて形成されていく教養、価値観、感性等となっています。ところで、「国語力」を構成する能力の中身ですが、まず、考える力とは、言葉を使ってある事柄を分析していったり、あるいは自分の考え、論理を構築したりという論理的思考力です。それから感じる力、相手の気持ちや文学作品の内容、表現などを感じとったり感動したりできる情緒力というのがありますが、そういう感じる力です。それから想像する力、表す力です。それが一番下のところを見ると、教養、価値観、感性等となっています。実は言葉を使って、その人の教養とか価値観とか感性がだんだん作り上げられていくわけです。我々は例えば何か事があったときに、自分で嫌な気がしたり、非常に怒ったりとかうれしかったりするわけですが、それを言語化することによって自分の感情を分析して、自分なりに納得していくということがあります。つまりその人が感性を育てていくというのは、やはり言語と密接にかかわっているわけです。そういう意味でその人の感性とか価値観、つまりどういうものをいいと考え、どういうものを自分にとって価値のないものと感じるかというのは、言語の力と非常にかかわっているのです。ですから、国語力の問題というのは、実は言葉の問題というよりも、その人そのもののあり方と非常に密接に結びついていってしまうのです。非常に大きな問題なのだということです。特にこの中では、「情緒力」という言葉が「感じる力」のところに出てきます。「情緒力」というのは耳慣れない言葉だと思います。これは実は答申の中で造語した言葉です。情緒力というのは一体何なのかということですが、冊子のほうではこんなふうに書いてあります。「さらに、近年の日本社会に見られる人心などの荒廃が、人間として持つべき感性・情緒を理解する力、すなわち、情緒力の欠如に起因する部分が大きいと考えられることも問題である。情緒力とは、ここでは、例えば、他人の痛みを自分の痛みとして感じる心、美的感性、もののあわれ、懐かしさ、家族愛、郷土愛、日本の文化・伝統・自然を愛する祖国愛、名誉や恥といった社会的・文化的な価値にかかわる感性・情緒を自らのものとして受け止め、理解できる力である。この力は自然に身に付くものではなく、主に国語教育を通して体得されるものである。国語教育の大きな目標は、このような情緒力を確実に育成し、それによって確かな教養や大局観を培うことにある。そして、そのためには情緒力の形成に欠くことのできない読書が特に大切であり、「自ら本に手を伸ばす子供を育てる国語教育が必要である。」と書かれています。この答申では、「情緒力」

という言葉を造語して、そういう力が国語教育の中できちんと育てていく力としてもっと認識され、かつ、それをどうやって育てていくかということを考えていかないといけないのではないかということを提案しています。この答申は、読んでいくと分かるのですが、論理的思考力、それから今の情緒力、その二つを支えている、その人の持っている「語彙力」という言い方をしていますが、それを国語科教育の中でしっかり育てようと述べています。時間の関係で、最後に2点だけ申し上げます。この情緒力についてぜひ考えていただきたいことは、論理的思考力が重要であるということは、おそらく皆さん異論のないことだと思います。そしてそれを国語教育の中でも育てていこうということは、異論のないところだと思いますが、この答申の中には「論理的思考力が適切に展開されていくためには、実は情緒力が必要なのだ」ということが書かれています。どうしてかということの一つ目の話題として、お話したいと思います。論理的思考というのは、簡単な^ひ喩で言うと、鎖がつながっているようなものです。論理の飛躍があると鎖と鎖がつながらなくなりますから、論理的思考ではなくなるわけです。論理の飛躍があつたり、論理と論理の間に矛盾があつたりすると鎖がつながっていきませんよね。だから、これは論理的思考ではなくなるということです。何となく論理的思考というのは、非常にいいものという感じがすると思いますが、論理には数学的な論理と日常的な論理があるということを考えていただきたいのです。例えば何か事件があつて、自分の責任を逃れるためだけに論理を組み立てることもできるわけです。真実は別です。真実はどうか分からないけれども、自分が言い逃れるためだけに論理をつないでいくことはいくらでもできるわけです。あるいはもっと嫌な人の場合は、自分に責任がないということだけではなくて、人のせいにしようと思つて、話を組み立てていくこともできるわけです。そしてそれが矛盾なくつながっていれば、それはそれでそれなりの説得力が出てくるわけです。ですから、日常的な論理の特徴は、自分の意思でどういう形にも組み立てることができるということです。ところが数学的な論理というのは、どういうふうに組み立てていくか、例えば自分が言い逃れをするためにとかということは入り込む余地がないのです。 $1 + 1 = 2$ で、 $2 \times 3 = 6$ というところは、全く動かないのです。ですから一つ一つの論理について、それが数学的に正しいか正しくないかが明確に決まってくるわけです。ところが、日常使っている言葉の論理というのは、そんなふう^にに自分自身がどういう組み立て方をしようかということで、いくらでも組み立て方を選ぶことができます。非常に嫌な言い方をすると、例えば完全犯罪者がいるとすれば、こ

これは論理的思考力が非常に高いはずです。誰からどんなことを言われても、絶対にボロが出ないように論理を組み立てていくわけです。でも情緒力は極めて低いはずです。ですから国語教育の中で考えていく論理、それが数学的な論理と違うのは、そういうふうに情緒力、人の痛みを自分の痛みとして感じるという情緒力を同時に育てていかないと、論理的思考力というのは、ある面どうにでも使うことができるという意味で、非常に恐いものになるということです。もう一つは学校教育のことだけではなくて、脳科学の知見なども入って、答申は生涯学習的な観点からも書かれています。ですから学校教育だけではないという意味で最初にお願ひしたように、ぜひ答申の全体をお読みいただきたいということです。時間になりましたので終わります。これからの国語教育というのは、ここで分析されているような国語力、「国語教育という、読み書きが大事だ」、「いや話す、聞く、だ」ということではなくて、ここで分析されている国語力をきちんと子供の中に育てていくということが、もっと真剣に考えられていくべきだし、そもそもどちらがいいかという議論をしているようなことでは、駄目だと思います。そういう意味で、この答申をきっかけに国語の重要性ということを多くの方が実感して下さるとありがたいと考えております。どうもありがとうございました。

【日本語教育の立場から】野山 広

(配布資料：p. 9～14)

野山 続いて日本語教育の観点から、野山が発表させていただきます。途中でビデオを5分ほどお見せします。見づらいところに座っている方は、前のほうがまだ空いていますので、今のうちに移動していただければと思います。見えないときは適当に移動して下さい。よろしくお願ひします。それでは私の話に入りたいと思います。私のレジュメですが、「ことばと国際理解」の資料の9ページから始まっています。9ページから14ページまでが私の話の関連資料です。最初に、「暮らしに生きることば～多文化共生社会に対応した日本語教育とは～」という大きなテーマを出していますが、皆さんの資料の中で「国語研の窓」というのが2種類入っているかと思います。こういうものです。「国語研の窓」をなぜ今回入れさせていただいたかと言うと、もちろん国語研を知っていただくためにも読んでいただきたいわけですが、まず23号のほうに、私が書いたエッセイのようなものが載っていて、「暮らしに生きることば、多文化共生社会」と書きました。まだ「多文化共生社会」という言葉はマイナーで知られていない言葉だと思います。この言葉がいずれ暮らしに根ざして生きる言葉になったときに、世の中が随分と変わるであ

ろうということで、そこに入れさせていただいた次第です。注目すべき点として、左側の下から右の上にかけて、総務省の重点施策で「多文化共生社会」という言葉が使われたという話を入れました。これは画期的なことで、多分予算上、こういう言葉が初めて使われたということで、今後こういった言葉に関連した予算が日本語教育の問題も含めてつく可能性が高いであろうということで、そこに書きました、一方で、日本経団連が今後の社会を予想した上で、「外国人受け入れ問題に関する提言」というのを出しています。この中で、受け入れのための省庁として「多文化共生庁」というのを作ってはどうかということを提言しています。こういう動きがあるというのをまず知っておいていただきたいのですが、こういった社会になればなるほど、先ほどの氏原さんの話にありました国語の教育ももちろん大切なのですが、日本語教育というのは海外から来た方と日本にずっといらっしゃる方の狭間、つまり水際の教育なので、とても大切な問題になってきます。日本語教育の可能性は非常に広がるわけですが、もちろんリスクもあって、危ない橋を渡る必要もたくさん目の前に転がってきます。危ない橋を渡るときにする貴重な経験というのは実は醍醐味であったりするわけですが、それを味わうためには、時間がかかりますし、その過程で、思いっきり思考しなくてはなりません。その昔、バフウチンという人が「自分の言葉の能力の限界＝思考力の限界である」と言っています。それから考えると思考するための日本語の能力というものを、第一言語が日本語でない方、子供さんも含めてですが、どうやってつけることができるか、あるいは支援することができるかということが、非常に大きな問題になってきているということです。2番目として、10ページに統計的な数字を入れたものを提示してあります。外国人登録者数は、最新情報だと197万人と数字が増えています。全人口のだいたい1.55%と発表されていますが、全国的に3%、5%あるいは10%を超えている地域というのは、たくさんはありません。そういう地域を「集住都市」と呼んでいるわけですが、ほとんどのところはまだ1%台か、場合によっては零点何%というところで、まだ目に見えない状況にあるということです。そういう目に見えない人たちが国内に分散している一方で、海外に目を向けると、学習者数が235万人という国際交流基金の統計数字がそこに出ています。ほとんどは外国語として日本語を学んでいる小学生、中学生、高校生だそうです。そこで、言葉の問題を文化的側面、それから言語的知識の側面の両方から見てみたときにどうなるかということで、次の11ページの図を見ていただきたいと思います。この11ページの図は私自身が作った図ですが、国語の教育と日本語の教育、それから第一言

語，第二言語，継承語，外国語というのを，文化的深さの絶対値と言語的知識の絶対値という枠組みでとらえて描いたものです。外枠の実線が日本人として生まれて，両親が日本人で日本語話者で，日本語環境の中で育って大人になり，例えば大学まで行って教育を受けた成人として持っているであろう，おそらく超級の日本語の能力を持った人たちの力を実線で表しています。そのすぐ下の線が，第一言語として日本語を学んだ人で，幼いころに海外に行って成長した日本人，つまり海外子女の方々の中にこうした人がいます。それから第二言語として学ぶ人ですが，大人も子供も時に 1990 年代以降たくさん海外から来日しています。こうした人たちの場合には，文化的深さの絶対数は当然浅くなるということが前提になります。次に松本さんが話してくださる外国語の教育として，例えば英語を我々が習うときは，文化的深さの絶対値がもっと浅くなることになります。一方で，海外に目を向けると，南米とかカナダとかに日系 3 世とか 4 世の方が住んでいらっしゃる。その方は非常に色濃い日本の文化を今でも残していらっしゃる。方言も含めて，地方の踊りとか太鼓とか，日本人よりはるかにできたり，着物を着ることができたりします。そういうある種のステレオタイプの文化ですが，こういうものを絶対値で測るとしたら，非常に深いあるいは幅広いものがある一方で，漢字の読み書きとか文字の読み書きはできないという状況も含めて，知識の幅は非常に狭いということです。これほど多様な日本語学習者がいるという状況で，国語の問題が一方であると，日本語，外国語と考えるときに，それが第一言語，第二言語，あるいは継承語，外国語という状況で，当然体系も違うし，関係者の動きも変わってくるという状況になります。その中で，日本に今どんな状況が発生しているかということを理解していただくために，次の 12 ページ，13 ページの「隣の町のブラジル人」を用意させていただきました。最後の「おわりに」という 68 ページと書いているところに，「国際理解強力の推進を目指した研修，再教育の重要性」ということで，M I A（武蔵野市国際交流協会）でやっている教員ワークショップのことを入れさせていただいているわけですが，それ以外に M I A では「日本語教師のまるごと訪問」というのを小学校，中学校と協働で行っています。これからビデオをご覧になっていただきますが，この行動はいわゆる日本人側の意識を改革するということが当然，重要な目的になっていますし，一方で日本語の学習者が将来子供が通うかもしれない小学校をちゃんと知ってもらうことにも役に立っているものだったりします。いろんな要素が入っているビデオで，実は事前の 3 日間の研修の中の 2 日目の午前中にお見せしたビデオです。この中にはすでに見た方もいら

っしやるかと思いますが、つなぐ意味と共有する意味で、このビデオを見ていただきたいと思います。それではよろしくお願ひ致します。ビデオはちょっと時間がかかりそうなので、先に14ページを説明しておきます。14ページに載せた資料は、「外国人受け入れ問題に関する提言」の概要です。この概要にも日本語教育の問題、あるいは外国人の生活環境の整備の問題ということで、外国人の子供達の日本語教育の充実の問題も取り上げられています。特に下の9つの四角がありますが、これは具体的な提案で、例えば日本ではまだまだ国籍を変えるのは大変ですし、一方で永住権を取るのもとても大変なので、グリーンカードを発行してはどうかという提案をしています。それから、外国の方が日本に来て働く場合に、年金を払い損で帰ってしまうという例が少ないので、2国間協定を結んで、年金を払い損にならないようにしたらどうかという提案もそこに出ています。日本語教育の問題を考えると、どうしてもこういう社会とか生活の問題というのは、背景という意味では非常に関係があります。もちろん国語も英語も関係があるのですが、第二言語として日本語を学んでいる人たちは、こういった意味でいろんな問題を抱えながら必死になって、日本の地域社会で生きていく必要に迫られている、という状況にあります。ビデオだめでしょうか？ そうですか。そしたら、さっきのこの図に戻ってもらってよろしいでしょうか。私の資料そのものはそこまでで、あと3分ほど時間がありますので少し説明いたします。国語と日本語、それから英語の問題、それから前半3日間の話を取り入れて、そこに野山作成のキーワードとその関連図というのを入れ込んだわけです。そのちょうど真ん中あたりに、自己肯定感とか自尊感情という言葉が出ています。カタカナで「セルフエスティーム」という言葉を入れていますが、この言葉は国際理解教育の立場に詳しい方はよくご存知の言葉で、コミュニケーション能力に詳しい方、あるいは心理学に詳しい方もよく知っている言葉です。先ほど氏原さんの話の中に「論理的思考力の基盤としての情緒力」の話がありました。情緒力をしっかり身に付けるために最も必要なものとして、自己肯定感、あるいは自尊感情というのが必要になることは、皆さんも納得がいくことではないかと思います。この感情、あるいは気持ちというものを作るために、実は言葉の教育がとても重要であるということです。言葉の教育をやる時にいつでも重要な過程というのがあって、そこには文化理解の過程とか、問題解決の過程とか、将来を想像したり夢を描いたり、一歩先のことを考えたりというような行為というか、通過儀礼が必要になります。それは夢を抱いているだけではなくて、当然語る相手があります。関係性を作ることで、協力しながらいろん

なものをつくり上げていく。その過程で否定もされたり、あるいは議論を投げ掛けられたり、あるいはほめられたりすることもあるし、泣かされたりすることもあるでしょう。そういう何でもありという状況の会話の状況をここで会話というふうに考えれば、会話そのものが数限りなくおこるような環境というのをどうやって作るのかというのは、実は国語でも日本語でも英語でも大切だということになります。下に書いてある言語生活力、国語力、日本語能力、対話力、言語能力というのが基盤になっているわけだし、その能力を支えているのが家族生活、あるいは地域社会だったりします。もちろん親から習う言葉の教育、学校で習う言葉の教育、地域で習う言葉の教育というのが相まって、そこに書いてあるような母語、第一言語、第二言語、継承語、外国語等々の言葉の力が育っていくわけです。大事なことは、先ほど申し上げた、自己肯定感と自尊感情を培うことです。それができることで初めて、国際理解の促進ということに一步足を踏み入れやすくなりますし、おそらく人に対して優しくなるというか、柔軟になれるということになるでしょう。それができない限りにおいて、多文化共生社会、いろんな外国の方がいろんな癖を持った日本語を話す日本語社会というのが作られることとか、そういう人とコミュニケーションをしっかりとる、あるいは対話をしっかりとするということが、砂上の楼閣というか、幻想になってしまうということを、この図で示しています。こういう問題をすべてひっくるめて「言語生活」ととらえるならば、言語生活そのものを日頃からよく考えていただくということは、とても重要なのではないかということで、この図をまとめ上げてみました。それではビデオをご覧になっていただいて、私の話はここまでにしておきたいと思います。

<ビデオ上映>

MI Aから来ました。聞こえていますか？

今日はこんなにたくさんの方が集まって……中略…… A 小学校の同じ地域に、こんなにたくさんの外国人がいます。道で会ったりして“Hello!”, 「こんにちは!」とか、いろんな言葉で気持ちのいい言葉が交わせたらいいなと思います。よろしいでしょうか。ではいっせいのせで、「ありがとうございます」、いきますよ、いっせいのせ、「ありがとうございました」。

<ビデオ終了>

ありがとうございました。時間がおしてしまって恐縮ですが、今のビデオの中に、さっきお話ししたセルフエスティーム、子供達の自尊感情を^{はぐく}育む工夫がいろいろしてありま

す。具体的な話はまた後半でできるかと思しますので、とりあえず見ていただいて、共通の意識をここでためておいていただければ幸いです。また後半お話しできればと思います。ありがとうございました。

野山 では、続いて英語教育の観点から、松本さん、よろしくお願いします。

【英語教育の立場から】松本 茂

(配布資料 : p. 15~18)

松本 皆さんこんにちは、松本です。今日は「英語教育の立場から国際理解のための英語教育」ということでお話しをさせていただきます。最初にお断りしておきたいのは、今日は「学校教育」という枠組みの中での英語教育、あるいは英語学習ということでお話しをさせていただくということ。個人で英語をどういうふうに学習していくかという話ではありませんので、その点をご了解いただきたいと思います。個人で英語をどう学習したいかというご質問があるかと思いますが、その方は「シニアのためのものしり英語塾」という素晴らしいラジオ番組がありますので、そちらを聞いていただければと思います。

(笑) これで今日、私が来た目的の半分以上を果たしたのでこれで帰ってもいいのですが、そうはいかないのでお話しを続けさせていただきます。皆さんがお持ちのレジユメの15ページ以降に私がこれから使うパワーポイントのスライドのコピーがあります。基本的にはこの順番でお話しさせていただきたいと思います。国立国語研究所は莫大な予算をお持ちでしょうけれども、今日お持ちのパソコンは無線のマウスではないそうなので、私はあちらのほうに移動しないといけませんので、よろしくお願いします。このように聴衆の皆さんの中に入って話をするのは初めてなので、ワクワクします。参加型レクチャーと考えていただければと思います。私は仕事柄、中学、高校の先生方の現場を日々見ていて、英語の指導法、授業に様々な問題があると思っています。ただそのほとんどが別に英語だからという問題ではなくて、学校教育全般の問題であるわけです。いくつか例を挙げていきたいと思います。まず生徒たちが、何のために英語を学習しているかというのがよく分かっていません。それから、先生の役割が固定していて、常に先生が説明をするという説明役で終わってしまっているケースがほとんどです。生徒が英語を使う体験がとても少ないという状況です。また、教室の中ですべてが完結していて、いま見ていただいたような井の頭小学校のような状況というのは、ほとんどあり得ないということです。最近、高校などでは英語科とか国際科というのが結構あって、そこでは交換留学生を迎え入れるイベントとか、スピーチコンテストとか、あるいは海外に、短

期で修学旅行に出掛けるというのが、学校のパンフレットとかホームページにたくさん出てきます。しかし、そういった国際交流のイベントと普通の授業に、ほとんど関連性がないといったような状況があります。次に、教科書にかなりの問題点があるということです。国際的な問題や異文化を取り上げていますが、まずトピックに一貫性がない。地雷が出てきたと思ったら次は地球温暖化、その次は日本の俳句とかで、スーパーマーケット状態になっているということです。それも、読んでどうするのかというのがなくて、ほとんどの先生はどんなトピックであろうと、そこに出てくる文法事項や単語を覚えてもらえばいいという感じです。一つのトピックに関して、複数の意見が出ている英文がとても少ないのです。例えばタバコの害について書いてあるものがありますが、じゃあ「タバコの販売を禁止するべきではないか」というような提案がなされて、それに対する Yes と No の意見が出ているということがほとんどなく、一方的に「タバコが悪い」としか書いてない。そんなのは分かっているじゃないか、ということで終わってしまうことが結構あります。それから、文化の違いを強調し過ぎていることも結構あります。イギリス文化ではこうですとか、オーストラリアではこうですとかいった違いは出てきますが、「だから何なのか」ということは議論されず、表面的な扱いになっていることが結構あります。実際に現場ではどうなっているかと言うと、これは文部科学省の調べたデータですが、中学校では「英語をほとんど使用しない授業が 0.6%」、「英語を用いることが半分、あるいはそれ以下、63.6%」、「半分以上を英語で行っている」というのを足すと、1年生では 35.9% というような状況で、それがだんだん学年を追うにしたがって減っていくといった状態です。中学校のほうは 10 年、20 年と随分英語の指導法は変わってきていて、英語を使う先生が増えている状況です。では高校はどうかと言うと、基本的にオーラルコミュニケーションⅠとオーラルコミュニケーションⅡ、英語Ⅰ、英語Ⅱ、リーディング、ライティングという科目構成になっています。多くの学校は、高校1年生でオーラルコミュニケーションⅠと英語Ⅰをやり、2年生でオーラルコミュニケーションⅡをやるところはほとんどなくて、英語Ⅱをやって、3年でリーディングとライティングをやるといった展開になっています。英語Ⅰを横に見ていただくと分かると思いますが、ほとんどの授業が日本語で行われていて、8.8%がほとんど英語を使っていないという状況です。英語Ⅱになると、半分以上英語を使っているのは7%という状況です。先生がほとんど日本語で説明し、生徒に日本語で答えさせているという状況が、現在の日本の英語教育の実態ということです。この事態に対して文部科学省では、

「仕事で英語が使える日本人育成のための行動計画」というのを2年前に発表して、2007年度末までに実現しようということで、いろいろな施策が行われています。よく、文部科学省を批判するような本が出ていますが、どちらかと言うと現場よりも、文部科学省のほうが先を行っているという状況です。行動計画には実際にどういうことが書いてあるかと言うと、まず英語を使用する活動を積み重ねながら、コミュニケーション能力の育成を図るということ、それから英語の授業の大半を英語で行うようにしましょうということなどです。また、地域に英語教育に関する先進校を形成するというで、例えば群馬県の太田などのように、小学校から英語だけでやっていくような授業を推進したり、あるいはSELHiと呼ばれていますが、「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」ということで、現在では全国101の高校が指定されて、先進的な英語教育を行うようになってきました。大学ではGPと呼ばれていますが、先進的な英語教育を行う計画を出しているところには審査をして、多額の助成金を出して、これを支援しようということを行っています。英語教員に関しては、基本的に英語で授業を行うだけの英語力を持っているということで、中高の教員の目標値としてはTOEFL 550点、TOEIC 730点、英検準1級ということをも最低値として提示しているということと、2年前から全国5万人とも6万人とも言われている英語の先生全員に対して、5年間で研修を行うということです。今年の場合は全国の3大学が選ばれ、地域の英語教育のリーダーを育てるための研修がはじまります。私が所属している大学の研究所も、申請したらなぜか受かってしまって、あさってから3週間に渡って関東地域の先生方に対して研修を行うことになっています。それから、中高の英語の授業に週1回ネイティブ・スピーカーが参加し、英語に堪能な地域の人材を積極的に活用する。この最後の点に関しては、小学校の英語教育ということにらんでのことが大きな変革かと思います。ちなみに、小学校で英語教育がどうなるのかというのは、まだ決着がついていません。本来ならば、今年の3月末までに決着がつくはずだったのですが、多分この秋くらいに小学校で英語を必修科目にするのか、あるいは道徳のような特別活動にするのか、あるいは総合的な学習の時間の中で英語教育を行うのかといった点のいずれかが示されるのではないかと思います。これまでの内容をまとめると、英語教育の目的はコミュニケーション能力の育成を図ること。それから、授業の形態は英語を英語で教える、学ぶ。教師に対しては、英語で授業が行えるような英語力、あるいは聴取力を備えていることが重要であるというふうにまとめることができるかと思います。このコミュニケーション能力と

いうところがややこしい点です。ちょっと難しい説明になってしまいますが、コミュニケーションというのはメッセージの交換をし、その中でお互いに意味を創り出すのです。かつ社会との結びつきを作ったり、保っていったりするわけです。私が話していても、ここに180人の方がいらして、多分180通りの意味付けをしてお帰りになると思います。「コミュニケーションというのはこんなことだったよ」と、例えば家に帰ってどなたかにお話になっているのを全部まとめあげたら全部違った答えが出てくるのではないかというくらい、なかなか難しいものです。例えば、ほめたつもりで「今日はきれいだね」と言うと、「今日は？」とか言われて、こっちがおどおどしてしまうということもあります。こちらはほめたつもりでも、向こうは「いつもは汚いと思っているのね」という意味付けをすることによって、そこで誤解が生じてしまうということがあります。このコミュニケーションというのは双方向的なものですから、「コミュニケーション能力というものはありえない」というふうに考える人たちが結構います。なぜかと言うと、個人に能力が備わっているものではなくて、お互いの立場とか場とか、いろんな要素があってコミュニケーションがうまくいったりいかなかったりというのがあるからです。例えば皆さんがご夫婦の間でコミュニケーションがうまくいっていないとか、お子さんとコミュニケーションがうまくいっていないという場合に、一つの方法としては場所を変える。実際、私の息子も家では「金くれ」というときしかコミュニケーションを図ってくれないのですが、家族あるいは二人で食事に出掛けると、えらく饒舌^{じょうぜつ}にしゃべるのです。場を変えるだけで二人の関係が変わるのですが、そういう意味で能力があるのかないのかといったときに、何をもって能力なのかということ定義するのが難しいわけです。ただ、個人にそういった能力が全く内在しない、とすると何も教えられないということになります。またまた難しい定義で申し訳ないのですが、先ほど申し上げたようにコミュニケーションを図る際に、我々が持っている知識とか経験とかスキルを統合した上で、今のこの状況に合った言葉遣いとか言い方とか、態度とかを選択していくのです。それがうまくいくように、選択する行為の賢さということが、コミュニケーションの基礎的な能力なのだというふうに考えれば、言語教育とか国際理解教育においても、こういう基礎的な能力を教える、あるいは育成することができるのではないのでしょうか。コミュニケーションというのは、先ほどのビデオでもありましたように、やはり体験が非常に重要だと私も考えます。なぜかと言うとここに書いてありますように、コミュニケーションの基礎的な能力を身に付けるには、意味のあるコミュニケーション能力を積むしかな

いのです。キーワードは「意味のある」ということです。さっきの活動は、あの小学生たちにとっては意味のある活動だったと思います。初めて外国の市民の方々とああやっ
て交流して、自分達の自慢できる場所を自分で紹介して納得してもらったという意味で
す。英語でよくあるのが、同じ地域に住んでいる子供たち、例えば武蔵野市立なんとか
中学校とか杉並区立なんとか中学校の子供達が、 “Where are you from?”,
“I’ m from Musashino City.” とみんな言っているのです。“How old are you?”, “I’ m
fifteen.” って、みんな fifteen なのです。こういうのは意味のあるコミュニケーション
体験とはいえないと考えられると思います。コミュニケーション能力を、今までの学
校教育は意味あるコミュニケーション活動を通して育てていなかったといえるのではな
いでしょうか。これは痛烈な批判ですが、「日本の教室で生徒たちが最初に覚えたのは、
ぼーっとするというので、これは『Newsweek 日本版』に出ていたことです。確かにい
ろんな授業をいろんな学校で見せていただきますが、先生は一生懸命前のほうで話して
いるのですが、先生の意識は先生から2～3m くらいのところにいる生徒にしか向いて
いなくて、後ろのほうにいる生徒については、ほとんど意識されていないのです。生徒
は他のことをしていたり、寝ていたりという状況が全国津々浦々で、毎日のように繰り
返されているような気がします。では、どうしたらいいかということで、英語教育でも
最近では Project Base Learning ということが盛んに言われるようになっていきます。まず
上のほうは従来型の “Teacher-centered Teaching” です。先生の力量というのは、生徒
に分かりやすく説明できるかどうかということにあるとされてきました。ところが、
それでは積極的な学びはおこらない。特に英語を使って国際理解を体験的に学習する
というのは、これでは絶対にありえません。先生から質問されれば答えられるという
のでは、国際理解を積極的に行おうという態度は養えないわけです。「助ける気はある
のですが、あの外国の人は何も質問しないから私は何も言わなかったの」というよう
な生徒になってしまう。一方、“Student-Centered Learning” という、「学び」を
何とかおこさせようという教育方法です。この方法では、先生はコーディネーター
の役として、生徒同士の中に「学び」をおこす。ここで終わってしまうと、授業
の中で完結しちゃうわけです。これでも上記の方法よりはいいですね。要するに
コミュニケーションの体験として、意味あるものになっていればこれでもいいと思
います。例えば地雷がある、それについて今まで全然自分たちの問題としてとら
えていなかったけど、カンボジアの子供たちは苦しんでいることについて、みんな
が真剣に討論できるような組み立てを先生がで

きていれば、その問題が自分たちにとってより近くなる、関係性が強くなるということで、意味のあるコミュニケーションになっています。あるいは、北朝鮮に対して経済制裁をすべきであるというようなことを高校生が議論するということは、意味のあるコミュニケーションになると思います。理想的には横にある“C”，コミュニティとの関連性の中において、生徒自身が何か具体的に貢献できるということまで話題にのぼるとよいのですが。先ほどの、井の頭小学校のやり方というのは、地域の人たちに自分たちの小学校を紹介して、何かその人のためになったということによって、セルフエスティームも高まるということです。語学教育の点から言うと、自分たちの英語が通じただけではなくて、役に立った。例えば、英語の教科書に日本の民話が載っている、民話を読んで、「だから何なのさ」で普通は終わるわけです。ここでは too～to 構文とか、全然内容とは関係のないことに焦点を当てて終わるわけですが、ではその民話をどうやって“C”と結びつけていくかというのが先生の力量になってきます。例えばうちの付属高校でやったことは、デンマークに関係校があり、その近くある学校で日本語を習っている人たちがいるので、その生徒たちと交流するということです。まだ日本語が入門レベルで、日本語で読めない人たちに向けて日本の民話を、英語で紹介をします。それについて質問を英語の E-mail で受けます。それについて答えられるようなプレゼンテーションを授業の中でやって、それをみんなまとめて E-mail で返してということを行います。そうすると例えば質問として、「桃太郎は何歳なのですか？」とか、「鬼退治にキジを連れて行って役に立つのですか？」とかいう質問が来て、それについてみんなが考えることによって、新たな発想が浮かんでくるわけです。「そんな質問をするんだあ」と驚きながら調べる。そして、自分たちが考えて書いた英語で通じたときの喜びは大きく、そのときに覚えた表現はすんなり入ってくるわけです。普段は「単語を覚えなさい！ 20 回書けばいいんだ！」。生徒は「先生はそんなことやっているのか？」と言いたいのですが、言えないわけです。授業の改善のキーワードの一つは、関係性です。生徒と先生の関係がよくないとコミュニケーション教育は無理です。強圧的に押さえ込んでいる人たちの授業は静かでもいいのですが、そこにはほとんどコミュニケーションは存在しないのです。先生と生徒の信頼関係、あるいは生徒同士の信頼関係、「この仲間であれば何を言っても一応は許されるという関係性がある」ことが大切です。次に大切なのは計画性です。急に「活動しよう、スピーチをしよう」と始めるケースが少なくないのですが、急にスピーチと言われても生徒は困るわけです。1年生の段階から3年生の段階まで、英語でど

のような体験をさせるのかという計画性がなければならぬし、1年のときは何、2年生のときは何というようなことを決めておく必要があります。それから、次に重要なのは自律です。要するに答えを待っている生徒を育てても、国際理解とか国際交流にはほとんど役に立たないのです。自分たちで考える、「そうではないのではないか、こんなことをすればいいんじゃないか」ということを考えさせるには、やはり体験を通じた学習が必要だと思います。それから次に関連性です。これが一番難しく、高校1年生、2年生が使う教科書に対して、生徒が最初から自分の生活と関連があると思っているようなトピックは皆無です。ですからこれをどういうふうに結びつけるかということです。自分には関係ないと思っているトピックを、自分と関連付けて考えさせていく。そこに先生の力量が必要になってきます。次に、本文を読む理由です。読んでから何らかの活動をするというのなら分かるのですが、読んでおしまい、感想も話し合わないというのであれば、別に学校に来て勉強する必要もないのではないかとということになってしまいます。例えば、国連の活動をしている人の話を読んだら、「それを読む理由は何なのだろう」ということを、先生がまず考えないといけないと思います。それから次に連携です。学校の先生が一番弱いところは、他の教科で何をしているか全く知らない、不可侵条約を結んでいるような状況です。ところが実際、高校や中学の英語の教科書を見てみると、いきものの話が出てくると、生物の時間にやっていることと結構、関係しているのです。ですから教科どうしの連携をすることが望まれます。最近では国語の教科書にはスピーチをすとかディスカッションをすとか、ディベートをすということになっているわけです。そういう活動をやったならば、その後英語が同じような活動をすれば、スムーズに学習が進むのですが、そのへんの連携がとれていないということがあります。それからあとは一貫性です。小中高大と同じような学習の形態をしていくことが重要でしょうし、普段やっている授業とテストというものの連携、一貫性です。例えば普段は英語をかなり使った授業をしているのに、同じ学年を持っているもう1人の先生が文法をやっているために、定期試験は全部「訳しなさい」という問題が出てると、指導と評価に一貫性がないですから生徒はやる気にならないのは当然のことだと思います。今日はかなり大胆なことを申し上げました。今はオーラルコミュニケーションという授業があつて、一定の成果を挙げているのですが、オーラルコミュニケーションという科目があるがために、英語Ⅰと英語Ⅱという核となる授業の改善は手付かず状態です。英語Ⅰ、英語Ⅱは「後ろめたさなく日本語を使っていい」みたいな授業になってしまってい

ます。この状況を改善するために、プロジェクト学習や討論の学習を推進するとよいのではないかと思います。また、テーマ別のシラバスを導入する、あるいは地域社会の外国市民との連携を強化しているということがこれから重要だと思えます。先生たちご自身もこのワークショップに参加された方のように、国際的活動体験というのを推進していかないと、どういうところで「学び」がおき、どういうことをすると生徒は達成感を得て、どういうことがやりがいのある活動なのかということが理解できないので、結局うわべだけの英語を教えておしまいとなってしまうがちです。生徒に目標を掲げられないので、「受験に出る」とうそをついて、自分の面子^{めんつ}を保っているといったようなことが、綿々で行われているといった状況だと思えます。かなり大胆なことを申し上げたのは、後半部分のディスカッションのためになるかと思ったためです。皆さんのお手元にある質問用紙に異論、反論、オブジェクションを書いていただければと思います。どうもありがとうございます。

司会 前半の発表が終わりました。皆さんのお手元に質問用紙があるかと思います。御質問がありましたら、それに書いて近くの国語研の者に渡していただければと思います。休憩に入りたいと思います。予定では3時までですが、すぐに3時になってしまいますので、3時15分まで休憩ということで、後半を15分おして始まりとしたいと思います。よろしくをお願いします。

<休憩>

【ディスカッション】

野山 最初のコメントを杉戸所長からしていただければと思います。よろしくをお願いします。

杉戸 それでは、一つだけに絞ってコメントさせていただきます。今日のフォーラムは上に掲げられている通りで、特に「国際理解につながることばの教育」という副題を意識しながら、お三方の話を伺いました。たくさんの考え方とか用語が提出されて説明されたわけですが、私なりにそれにどう1本の筋を通して帰ろうか、たくさんあってもどうせ帰ると忘れてしまう、1本筋を通して帰ろうと思いました。一つの言葉を繰り返しつつやきながら聞いていたように思います。その言葉は「たじろがない、おたおたしない」、これが国際理解のための言葉の教育の心構えとしての一番の基本にあるということ、3人がそれぞれ別の言葉、別の文脈で示されたように思います。言葉の教育あるいは学

習ですが、学習者や生徒達に不十分な言葉、あるいは不思議な言葉、まだ勉強中で間違いとか至らないところをたくさん含んだ言葉などをいっぱい出してくると思うのです。教室だけではなくて、町で暮らす場合も同じです。逆にそういう不十分な言葉は、我々が外国で自分が話す言葉にもいっぱい入っていると思うのです。それを受ける側に立って考えて思うのが、その「たじろがない、おたおたしない」です。ここで足をぐっと踏ん張って、まずはその不思議な、不十分な、あるいは間違っただけの言葉を受け止めるところに時間を取りたい。そういうことをいろいろな言い方でおっしゃったように思いました。唐突な言い方で恐縮ですが、そんなふうに思います。例えば思い出しながら聞いていたのは、自分自身の経験なのですが、よく紹介される例です。私も留学生とか海外の日本語教師の前で講義をしたことがあるのですが、授業が終わって教卓のところに資料を片付けていると、おもむろに受講生が近寄ってきて、「先生、今日の授業よくできました」と、ほめてくれるわけです。前々からそういうことがあるということを知りながら聞いて知っていましたので、中国で初めてそれを生で言われたときに、「来たな！」と思いました。しかしまだその頃、若かったんですね。頭に血が上って、すぐに「それは日本語ではちょっとおかしいんだよ。せいぜい「ありがとう」くらいにしておいたほうがいいんじゃないか？」という話をしました。別にその学生はそれが言いたくて近寄ってきたわけではなくて、それは向こうのあいさつで、質問がしたかったから近寄ってきたのです。ところがいきなり頭ごなしに私が「それはまずい」とか言い出したので、質問は中途半端で終わって、気まずい思いをした記憶があります。そこでぐっと我慢することが必要だったと、今は反省しています。例は一つだけにしますが、こういうことはたくさんあると思います。国際理解を進めていくために、言葉をまず勉強しないといけない。そういうときには外国語だけではなくて、自分の言葉、母語にせよ、こういう至らない不思議な言葉遣い、ちょっと間違っただけの言葉遣いにぶつかることは、言葉の教育の場面ではつきものだと思います。さらに教育という場だけでなく、先ほども言ったのですが、普段の暮らしの中でも外国から来た人、あるいは日本語がまだ不十分な人と接するときには、同じような経験を覚悟しなければなりません。さらにここは私なりに強調したいのですが、同じ日本人同士でも、出身地とか年齢とか性別が異なると、よく似た経験をします。私も研究所と同じ年齢の56歳なのですが、50も半ばを過ぎますと、やはり若者言葉にはたじろぐことが多くなりました。いずれもひっくり返して言えば、言葉の多様性、一筋縄ではいかないようないろいろな不思議な言葉にどう向かうのか、どう身を構える

のか、それが今日の表題の「国際理解につながる言葉の教育」でこのテーマを考えると
きの、一番基本的な出発点の心構えです。いろいろな制度とか協力の方法とかいったこ
とが、いろいろな言葉で今日も説明されましたけれども、それらを行っていく上で、あ
るいはそれらを支える上で持つべき心構えとしての出発点ということだと感じます。た
じろぐとか、おたおたするというと、いろいろな行動をとると思います。よく言われる
のは、日本人は少しでも日本語ができる外国人の日本語を聞くと、「お上手ですね」とほ
めてしまうということがあります。これもたじろいでいる一つの症状だと言っていると思
います。あるいは逆に、「今の言い方おかしいよ」とか、「正しくはこうだよ」という
ふうに頭ごなしに間違いをすぐに直したりする、これもその次の次の段階では必要だ
と思いますが、すぐにやるのはおたおたしている症状の表れだろうと思います。そこで深
呼吸でもして、一息おいて、まずは受け止めるということが必要だと思います。なんで
この生徒はこういう言い方をしたのか、なんでこの人はこういうふうにしたのかとい
うことを考えるということです。ここが、なぜおたおたしないことが必要だと感じたか
の理由になります。不思議な言葉遣い、あるいは至らない言葉遣い、それは日本語
を勉強している人の日本語はそうかもしれないけれども、その学んでいる人、話し手
や書き手の母語とか母語の言語社会の習慣、あるいはその人の暮らし、あるいは背負っ
た社会というのがかいまみえる可能性が非常にあるというものだと思います。これは大
切にしないといけないことだと思います。そこを若い頃の私がやったように、いきなり
直したり、受け入れすぎたりすることは、非常にもったいない。その人にとっても申し
訳ないことだし、大きく見て国際社会へ進めるための言葉の教育を考える上で、もった
いないことだと思います。野山さんの話の中には、多文化共生社会の暮らしに生きる言
葉とか、共に生きる、あるいは生かすことの困難さと醍醐味という言葉がこの資料に載
っていました。醍醐味というのを別の言葉で野山さんは説明しておきました。それから
松本さんの資料の17ページの左下のスライドに「固い言葉ですが」と前置きを置きなが
らおっしゃった、「コミュニケーションのための基礎的能力」のことです。「他者との結
びつきを創造したり保持したり、意味を創出していく過程で」のところ。特に感じ
たのは、「自らも言語、非言語を選択することの賢明さ」ということです。「賢明さ」と
いうことを味わい深く伺いました。私はそれを私なりに「おたおたしない賢明さ」とと
らえました。氏原さんは「情緒力」という言葉を使って研究されました。考える力、感
じる力、あるいは想像する力ということで、国語力の上のほうに書いてあるものです。

それを支える情緒力という中に、私の「おたおたしない」ということは、私の勝手な解釈では入ると思います。3人の話はそういう形で1本につながって伺うことができたと思っています。「たじろがない、おたおたしない」、足を踏ん張って相手が話したり書いたりするのを不思議な、場合によっては不十分であったり間違ったりしているその言葉を、まずは受け止めること。その背後にある別の言語生活の考え方に思いを浸すことが、この副題の一番の根っこにあるべき気持ちの持ちようではないかと伺いました。

野山 ありがとうございます。引き続き、国際理解教育という観点から、早稲田大学教授の山西優二さんにコメントをいただきたいと思います。

山西 どうぞよろしく申し上げます。今日は4日目になるわけですが、この中で学校と地域が作る国際協力のセミナーに参加された方、ちょっと手を挙げて下さい。大変少ないですね。あらかじめ40名から50名の方々に、3日間の「地域と学校が作る国際理解教育」の4日目のプログラムとして、今日御参加いただくという話もあったのですが、一部来られている方々とお話をしますと、3日間、かなり内容の濃いセミナーだったものですから、さすがに4日目になると皆さんかなり疲れているということです。今日はそういう意味ではわりと新しい方々が多いなという印象があったものですから、最初に聞かせていただきました。私は「国際理解開発教育」という分野で約20年やっている中で、今回最初に国際理解というものを3日間、さらに本日4日目のプログラムの中で私たちがどう位置付けてきて、その議論をしてきているのかということをお話して、その立場からコメントさせていただければと思います。今、杉戸所長が「じつとがまん」とおっしゃったのですが、私もどの程度我慢して発言しなくてはいけないのか、発言の時間はほんの7分、長くて10分ということですので、少し我慢しながらできるだけポイントは絞りたいと思います。一言で国際理解教育という部分は、多くの場合は文化理解であるとか、国理解ということにとらえられがちですが、最終的には私たちは平和な社会をどう作っていくのか、国際理解教育の基本は平和実現、もしくは平和な文化を作る、です。言い方を変えれば多文化共生社会の、そういう面では平和な社会、平和な文化ということにつながっていくことが大事だと思います。その社会を私たちはどう作り出していくのか。もともとは第一次、第二次の大きな戦争への反省から動きだした教育活動ですから、そういうところに原点があるのです。その中で3日間ずっと議論してきたのは、3つのアプローチがあるということです。一つが人間理解、もしくは人間関係作りアプローチです。こういった問題を抱えていくときに、例えば平和な関係作りといった

ときに、それがすぐに文化と文化、国と国の関係で動くものではなくて、やはり人間対人間の関係作りから、そういった関係作りがおこっていく。ではお互いがどう理解し、お互いがどういう関係をつくっていくかというのが第1のアプローチです。次に文化理解です。人間と人間が触れ合っていると、その人間の行動様式とか、価値とか、もしくは生活様式というのは当然そこから見えてくるわけです。やはりそういったことに対しても、私たちは相互にどういった理解をしていくことができるか。また、その文化は決して個性的なものではないですから、お互いが出会う中で変容していくプロセスに対しても、私たちはどういった勉強をする必要があるか。さらには人間と文化というところをねらっていくと、そこには地域社会であったり、国際社会であったりが抱えているいろんな問題があります。その問題に対してどうアプローチできるかというのが第3の問題です。いわゆる、問題理解もしくは問題解決をどう行っていくかです。そういう国際理解、もしくは国際理解教育と呼ばれるものに大きく3つのアプローチというところから、過去3日間討議してきました。その3つのアプローチから、今日の3人のお話を聞いていますと、あらためて人間理解、もしくは人間関係というところが、まさしく教育を語るべきの根本的な問題であるからこそだと思のですが、すごくそこに力点が置かれた話を聞くことができたと思います。最初に国語力という言葉の中に、あらためて考える力、感じる力、想像する力、表す力というものがありますが、私たちの国際理解教育の中ではもっと知りたくなる、もっと考えたくなる、そしてもっと心と身体を動かしたくなるような学びを作ろうよという言葉で表現することがあります。ですからいろんなところでそれはつながっていきます。それは先ほどの野山さんの話、松本さんの話の中でも基本的な部分でセルフエスティームをされているというのも、まさしくそうだなという気がします。そこでさらに、国際理解教育の現場だと、どうしても言葉、ときには文字というものを使うことが多いです。それは日本語であったり、ときには英語であったりするわけですが、ではそれを文化理解というところからつなげていこうとすると、どういうつなぎ方があるのかというところについては、私も十分に落ちきれていないところがあります。一つはいわゆる日本語、もしくは英語を使って、さっき松本さんがおっしゃったように、テーマとして文化に関することを取り上げていくというアプローチは、いま学校教育の中で取り上げられているわけです。3日間の中で私も少しお話していたのですが、言葉を文化としてとらえていく。当然、言葉=文化ですから、あえて言葉を手段として取りながら何かテーマを追いかけるというよりは、言葉そのものの持つ

文化性にどう焦点化させて、そこから文化理解というものをどう作り出していくのか。それは文化というものの中に見られる語彙であるとか、そういった部分にある種の文化性がありますし、言葉そのものが今社会的文脈の中で変容していきます。その変容の中に文化の変容ということが当然のこととして見ていける。やはりそういった部分を国際理解という視点から、今後どういうふうに扱っていったらいいのか。地域の日本語教育の方と話していると、その方々はまさしくその渦中にいます。非常に多様な文化、多様な言語の中で日本語をどういうふうに位置付け、その中で私は言語、言葉というものをまさしく題材にした国際理解教育と一緒に作っていきたいという思いがずっとあるものですから、それについても御意見があればぜひともいただければと思います。あと、先ほどの問題解決のところで考えてみると、当然言語に関しては多くの問題があります。例えば英語が世界に広がっていく中で、世界の少数言語が姿を消しつつあります。これは多言語多文化、あるいは多文化共生という流れで見たときに、改めてこの問題をどう考えていくことができるのか。先ほど事前に松本さんとお話したときは、「最近、英語というのは文化を消そうとしているんだよ」ということでした。特定のアメリカとかイギリスとか、そういった文化を強調する意味は何なのかという問題提起が若干あったと思いますが、やはりそういった様子が日本にもあります。ただ、地域の中ではまさしく言語、母語の問題をどう扱っていくのか、そこにおける文化の問題をどう見ていくか、これは非常に大きな問題点だと思いますし、子供の成長、発達というところを見ると、例えば子供にとって英語教育が進みつつありますが、母語としての日本語と英語の関係をどうみるのか、もしくは外国籍の子供達にとっての母語と日本語教育の関係をどうとらえていくのか、それを子供の成長発達の中で、文化的アイデンティティや言語的アイデンティティの関係の中で、それをどうとらえていったらいいのか。これは地域、あるいは学校の中で国際理解教育をやる人間にとっては、すごく大きなテーマなのです。なかなかそれに対してきちんとした答えが見えてこなくて、その両者をどういうふうに扱っていかうとするかというところをぜひとも今日は考えたい。私は言葉の専門家ではないので、なかなかやりづらいお話をしますが、それは野山さんは非常に経験をお持ちだろうなと思います。先ほどの話の中でも第一言語、第二言語というがありましたので、そういったものについても表現の中では少し触れていただければと思います。そんな中で国際理解という視点から見てくると、人間関係または人間理解という視点と文化理解という視点と問題解決、これがある意味では非常にダイナミックな関係を作っていくの

が国際理解というものであるならば、まさしく言葉を通しての国際理解というところについても、このダイナミックな関係をこれから作り出して行く中で、国際理解というものがもっともっと深まっていけばいいと思います。

野山 ありがとうございます。最初の杉戸さんのコメントでは、我々の言葉に対する姿勢の問題として、いろんな日本語を話す人が現れた場合でも、まずはそれを柔軟に受けとめるという話があったと思います。それから、どのような違いと遭遇したとしても、あるいは驚きと遭遇しても、たじろいだり、おたおたしたりしないという話があったと思います。そういう意味でいくと、私達は今おたおたしそうな質問を受けたりしているのです。山西さんがいま言った、文化の問題とも関係があるので、最初に松本さんにふりたいと思います。“Student-centered LEARNING” のことで質問がきています。「コミュニケーションが伸びる、あるいは会話することができることが、本当に英語を上達させることで意味があるのだろうか。」という質問です。それに関連して、「国際理解のような問題は、社会科を通してでもできると思うけれども、英語でしかできない国際理解というのはどういったことがあるのでしょうか、具体的にもしあれば教えていただきたい。」という質問があります。関連でもう一つだけお聞きすると、「外国語といったときに、英語だけではないのですが、英語と他の外国語との関連を考えて、どのようにご自身が思っているらっしゃるか。」ということ、プラス「最近小学校で英語が導入されることがいろいろ言われていますが、松本先生としてはどう思っているらっしゃいますか。」ということがきています。いかがでしょうか。

松本 そんな4つも5つも……（笑）。私に何か恨みでもあるのですか（笑）。最初の“Student-centered LEARNING” が言語学習にどう影響するのかということ。まず授業を組み立てるにあたって、先生の役割をどうとらえるかということだと思います。生徒中心に学習をしてもらおうという立場をとった場合、全部が全部放し飼いのように生徒にやらせているわけではなくて、大事になってくるのは“Sequence”ということ、つまり「流れ」です。プロジェクトがあって、それが意味ある体験になるようにはどういう段階を経ていけば、生徒が最後に意味あるコミュニケーション活動ができるかという流れを作ることが大事なのです。“Student-centered” というふうに話をして、生徒同士がやって、先生は……ということに関して言えば、今のSELHiのほとんどの学校がディベートをやります。ディベートをやるのはいいのですが、“Sequence”，流れを考えずに、授業を今までと同じような形で行って、突然「ディベートをします」と言いだし

ます。しかも、なぜか知らないけれども死刑廃止とか、定番の暗いトピック（笑）で、教科書の内容とは関係のないものを、笑っている方はご自身にそういう体験があるのではないかと思います（笑）、論題にしてしまうわけです。内容的流れも言語的流れもない。どうしてそれをやるのか生徒も分からないでやってしまう。それは押し付けの“Student-centered”になってしまいます。流れを作る際に、その中にどういう言語表現を教えたいかということのを隠し味で入れるのです。このように御理解いただければと思います。それから、次の「国際理解は他の教科でもできるのではないか」というのは、確かにその通りだと思います。学校の授業というのはほとんどどの科目でもできることを、いろいろな手法、手段、視点を変えて教えているのだと思います。この理解というのに積極的にかかわりながら学習ができるというのが、言語教育のいいところだと思います。ですから、日本語とか英語とか他の言語もそうですが、直接的に触れ合う中で子供が自分で何かをつかんでいく。社会科の国際理解というのは、「アメリカの首都はどこにありますか？」とかという表面的な知識になりがちです。それから国際的な問題も、日本人同士で話し合っておしまいというケースが多いと思います。しかし、英語の場合には先ほど申し上げたように、外国の市民の方と話し合うとか、その人の前で何かをするとか、あるいはE-mailで同い年の生徒とやりとりをするという直接的なかかわり合いの中から、自分で理解するといったようなことが、特長として挙げられるのではないかと思います。それから他の外国語との関連ということですが、特に英語である必要はないと思いますし、地域によっては英語よりもロシア語をやったほうがいいのか中国語をやったほうがいいのかというところがあると思います。そういう意味では文部科学省が示している教育課程についても外国語が必修になりましたけれども、別に英語と指定しているわけではないので、それは別に英語である必要はないと思います。小学校の英語については、私は今、中教審のメンバーなので、なかなかここでは言いにくいのですが、消極的賛成派です。やりたい人がやればいいのかという立場です。これを必修にしてしまうと様々な問題がおきてくるのではないかと考えています。そういうことで御勘弁していただいて、たじろがないまま終わりたいと思います。

野山 ありがとうございます。今の説明で、参加型というか、先生ではなくて“Student-centered”の授業をやるときに流れが大事だということが分かりました。先ほどビデオを見ていただきましたが、あのビデオの中のアクティビティの計画は少なくとも半年以上の時間をかけているようです。どういうふうに訪問してどの手順で参加型

の学習を取り入れて、小学生に何のタスクをしてもらって、最後の給食の時間をどのように有効活用するかとか、流れを緻密に計画するのです。結果、3時間が見事に終わり、成功するときもあれば、あるハプニングでとんでもない状況になることもおこり得るということです。それでもたじろがずに、あの場を何とかこなしていく学習者の方もいらっしゃるれば、小学生もいるという状況の中で動いているわけです。小学生の児童がセルフエスティームということで、いろいろと獲得したり確認したりすることが多そうに見えますが、実は日本語の学習者ゼロベースの男性も、結構得ていることがあるのです。例えば二人が美術室に入ろうとした場面で、小学生は結局のところドアを閉めてしまいましたが、本当はその男性は入りたかったかもしれない雰囲気があります。実は本当は「入りたい」と言いたかったのかもしれませんが、その日本語が出てこなかったのでしょうし、男の子は「一応聞くだけ聞いたし、うんともすんとも言わないから閉めよう」という感じのコミュニケーション場面になったように思います。例えば、あの場面をもう1回振り返ることで、随分いろいろ学ぶことがあって、実は学習者そのものも得るものがあるというわけです。Mさん、今日はどこかにいらっしゃいますか？ Mさんは、この企画の担当で、ビデオの中にも出ておられたのですが、学習者がどのようなことをあそこで学んでいるかということについて、少し話していただければと思いますが、いかがでしょうか？

参加者 1 (M) 突然でたじろいでいます。外国の方々が何を学んでいらっしゃるかというと、今日の先生方のお話を伺っていて、ますます私は分からなくなっています。何を学んでいるか、特にその日本語学習を目的に地域の教室に来ていらっしゃる方が、学校に行くということにどんな学びがあるのかということ正面から聞かれると、ますます答えられなくなっています。今日ここでこの話をして下さった先生方からの何かヒントがいただけると、とてもありがたいなと思っています。さっき氏原先生が「算数や数学だったら一つの方式を超えていく、しかし国語はそういうものではない」とおっしゃったと同じようなことがあるのかなと思うのが、例えば今日見ていただいたビデオよりも、ちょっとは進歩したかなと思うことが7月1日にあったのです。そのときは、前もって外国の方々が皆さん、自分の伝えたいことを準備して下さっていました。そういう中から準備したものを子供達に伝えるということをやったのですが、中には自分の準備したことは伝えなかった、でも子供とのコミュニケーションの中から、自分が伝えようと思っていたこと以外のもので伝えたいことが出てきた、だから準備したことではないこと

を何とか日本語でやって、それで伝わったような気がするということがありました。それから日本語は、「子供さんの言葉はとても短くて簡単、私の言葉も短くて簡単、だから分かる」というふうにおっしゃる方もたくさんいらっしゃいました。だからそういうところに行くことによって、受け入れてくれる優しい子供達の中において、緊張というのがすごく和らいできて、その中で自分がリラックスして、何か伝えたい子供達からのメッセージがあって、その中から私はこれを引き受けて、これを伝えたいというやりとりがすごくあるのではないかという気がしています。日本語学習にどのようなにつなげたらいいのかということは大きなテーマになると思いますので、御指導いただければありがたいと思います。

野山 突然で恐縮でした。ありがとうございました。日本語学習者が学校訪問を終えて教室に戻って、その翌週のフィードバックの時間に、実は止めないといけないくらい何10分も「小学校でこういうことがあった、こんなことがあった」と日本語で語り始めることが時にはおこるのだそうです。一方、小学生のほうも同じようなことがおきていると推察されます。そのもう一つの、心がうきうきするような気持ちになるような豊かな情緒力の話につながるとは思いますが、そういう環境を訪問によって作っているということは確かにあると思います。それは両者にとって話をする必然性がおきやすい言語環境を作り出していると、言えるのではないかという気がします。それは当然、幼稚園の子供にとっては国語、日本語、重要なことがもっと分かるということと、外国人の方にとっては第二言語としての日本語あるいは外国語としての日本語のモチベーションが非常に高くなるという効果があるようです。今度は氏原先生に質問です。「情緒力」ということに関して多数の質問がきています。まず「情緒力というのを説明していただいたわけですが、それを育む、養う方法はあるのでしょうか」ということがきています。また「情緒力の育成の場合に、道徳の問題とか家族愛とか、愛国心とか、勇気とかとの関係について氏原先生はどうお思いですか」という質問がきています。それから「情緒力が「感じる力」だとしたときに、あの図表の中には身体感覚というのが文字としては出されていなかったですが、感じること、あるいは言語の問題を身体の問題に対してどのようにとらえていらっしゃいますか」というような質問がきていますが、いかがでしょうか？

氏原 私はおたおたしながら（笑）、お答えしたいと思います。まず「情緒力」ですが、さっき説明の中で申し上げたのですが、造語したわけですが、造語することについてはいろんな意見が出ました。「情操力」というのはどうかとか、あるいは「感受性」という言葉

がありますから、「感受力」という言葉はどうかとか…。いろいろ議論したのですが、なかなかいい言葉がない。その中で「情緒力」に落ち着いたのですが、その議論の中でとても大事なことだと思ったことをお話ししたいと思います。それは、いろんな意見が出たのですが、先ほど紹介した能力に対して、何か言葉を与えておきたいという点は全員が一致していたということです。我々の認識の在り方というか、言葉がないとそもそもそのことを意識することができない、ということがあります。ですから「情緒力」という言葉を与えることによって、それがこの答申の中で言えば、子供達に大切に育みたい能力の一つであるということを意識してもらおうと同時に、その重要性を訴えていこうということは一致していたのです。質問の「育む方法があるのか」ということですが、この答申に則して申し上げると、さっきはここを読んだわけです。もう1度繰り返しますが、「この力は自然に身に付くものではなく、主に国語教育を通して体得されるものである」。ここに国語教育という言葉が出てくるわけです。この答申の中には「国語科教育の在り方」みたいなところもあって、その中に実は情緒力の育成に関しては、こんなことが書いてあります。「学校における国語科教育では、「情緒力」論理的「思考力」思考そのものを支えていく「語彙力」の育成を重視することが必要である。情緒力を身に付けるためには、小学校段階から「読む」ことを重視し、国語科の授業の中で、文学作品を中心とした「読む」ことの授業を意図的・継続的に組み立てていくことが大切である。」と書いてあります。情緒力を育むときのひとつポイントは、やはりここに書いてある文学作品です。例えば人間の哀しみを描いた作品を読む。それによって、「人間というのはこんなときにはこんなことを感じるんだ、こんなときにはこんな気持ちになるのか」ということです。ただ、そういう作品が国語科教育の中で当然与えられるとしても、情緒力の育成の根本は、私は基本的にはさっき申し上げたように、「こういうときにはこういうことを感じるのか、人間はこんなことまで感じるものなのだね」ということを母語の力を使って、自分の中で、まさに自分の内面を掘り下げていく、自分自身の心の中に分け入っていくという経験を繰り返していくことが必要なのだろうと思います。御質問の中に道徳教育との関係のことが出てきましたけれども、ここを例えば「こういうときにはこういうふうにするものだ」とか、「こういうときにはこういうふうに考えないといけない」というような何か知識として教え込むということになると、子供達の深いところで本当には身に付かないのではないかと思います。非常に比喩的な言い方をしますが、この情緒力の育成については人間の様々な、心の琴線に触れるような文学作品を扱いなが

ら、それが子供達の骨の中に沁み込んでいくような、そこを知識の問題として、扱っていくと、やはり道徳教育になると思います。つまり「生き方としてどうなのか」という知識の問題になります。もちろんときにはそういう切り口も必要だと思います。それから、学校教育の中で、例えば小学校段階でも、最近読み聞かせがいろんなところで行われています。小学生や中学生にももっと学校の先生が読んであげていいと思います。本当に感動した、あるいはこれは本当に素晴らしいなと思うものを、そういう思いを込めて読んでいく。言葉というのは非常に不思議なもので、何か動いて伝わっていくのです。そういうものを大事にしていくということを国語科教育の中で考えていくということが、必要だと思っています。もう一つ、今そういうふうに言うと現行の学習指導要領との関係はどうなのか、「今の学習指導要領は文学作品を否定しているのではないか」という話が出てくるのですが、ここもちょっと誤解があるので申し上げておくと、現行の学習指導要領、あるいはその考え方の基になった教育課程審議会の考え方は、「あまりにも詳細な読解指導というのはやめよう」ということです。根掘り葉掘り、これはこうなんだと。そのときに子供達にとっても「あ、そうだ、そうだ」というような説明が併せてできればいいのですが、これは冒頭申し上げた現場の経験から言うと、難しい。自分が納得するような説明をもらえなかったということは、よく聞きますよね。先生の考えと合うか合わないかによって、○か×かが決まってくるわけです。そこをきちんと、さっきの論理的思考ではないのですが、先生方が子供達の心に入っていきような、さっきの例で申し上げると、「ここは押さえないといけない」、「ここを押さえると、こういうことがある程度ははっきりしてくる」というところをもっと大事にしていく必要があるのではないかなと思うのです。そういう意味で、国語科教育というものが言葉を使っているために、何となく分かっているだろうという甘えというか期待のようなものがあって、そういうところが大事にされていないのではないかなという気がします。そういうことで道徳教育の問題とは今言ったように、扱い方が違うと考えています。道徳教育の問題でやったのでは駄目だと思っています。最近、子供達の不幸な事件がたくさん起こりますね。今までだったら考えられないようなことが起こったときに、命の大切さを教えようとか、そういうことを子供達に言わないといけないということがよく話題になります。それはそれで非常にもっともだと思いますが、そのときにいくら「命を大事にしよう」ということを言っても、知識の問題になってしまっただけでは駄目だと思います。ですから、そういうことを日頃から意識していて、子供達の中にうまく入っていけるような、まさに流れと

いうものを絶えず考えていく必要があるのではないかと考えています。それからもう一つ、「身体の感覚はどうなのか」という話がありました。基本的には全くおっしゃる通りだと思います。ただ、思うのは、「身体の感覚とはどういうものなのか」という問題です。例えばということで申し上げますが、自分が非常に急いで家に帰らないといけない、あるいは別のことで頭がいっぱいだったときには、人とぶつかってもほとんど感じないということがありますよね。明らかに身体は人とぶつかっているのだけれども、感じないということがあります。あるいはほんのちょっとだけ身体が触れても、ひどく腹が立ったり、頭にきたりということもあります。そういう身体の感覚も、実はそれを意識し得るような言語を介して、「触れている」という状況を自分がどのように認識するかが極めて重要な問題になるわけです。ただし、答申では言語を中心に考えていますので、触れていませんが、考え方としては私もその通りだと思います。

野山 先ほどから英語や国語の問題に答えていただいているのですが、質問の中に「今の時間数が全く足りないのではないか」という意見もありました。それは多分お二人とも賛成はしてくれるだろうと思います。我々が英語を習ったときとか、昔の国語の時間数から考えれば随分と減っているという状況があって、これで先生にやってくれと言っても、難しい部分はきっとあるのだろうなという気はします。私への質問もいくつかきています。まず「国語研究所にふらっと行って図書館に入れるのか」とか（笑）、「常時受け付けているのか」という質問がありました。おいでになって下さい。図書館には休館でない限りは入れますので、おいでになって下さい。すいませんが、本の貸し出しそのものはやっていませんので、その場で読んでいただくことになるとは思いますが、ぜひ活用していただければと思います。それから、継承語の問題とか、第二言語、第三言語の質問がきていますが、私のイメージ図の第二言語というのは、1 + 1 と考えるのではなくて、第二言語は第三言語と考えていただいてもいいですし、家族の状況によっては第四言語という場合もあるかもしれませんから、そういう意味合いで第二言語が象徴的に書かれているものだと思って下さい。継承語について知りたい場合の、参考の本ですが、例えば中島和子という人が書いた『言葉と教育』という本があります。継承語についても触れていますし、第二言語習得の問題、評価の問題についても触れています。あとは国語研究所で研修をやっているのですが、その研修の際に関連した話や先生方の話をまとめたブックレットの見本があそこにあります。その中に実はこれに関連した本も何冊かありますので、ぜひ帰りに手にとって、見ていただいて、実際に気に入れば購入して

いただけたらありがたいです。それから、私あてに個別に子供達の状況を書いて下さった質問がきているのですが、終わった後にでも声を掛けて下さい。質問にはだいたい回答できたと思いますが、何人かの御質問にはお答えできなかつたり、御意見については御紹介できないものもありました。それはお許しいただきたいと思います。もう時間も無くなってきました。今日の話を踏まえた上で、最後に一言ずつまとめとしての話を伺いたいと思います。松本先生のほうから順番に左のほうに、よろしくをお願いします。

松本 まとめにはならないと思いますが、さっきMさんが御発言された内容に近いことです。国際交流をしていくことと言語教育をどう結びつけるかという視点で学校の先生に考えていただきたいのは、ああいう活動をしたときに、子供たちは言いたかったけれども言えなかったことがあるということです。もう一つ、学校の授業だけでなくその交流の過程で新しく学んだ表現や、相手の態度もあります。そういうものを書き出してもらうことがすごく大事だと思います。学習した後にどういうことを生徒、学生が感じ、何を学び取ったかを確認していかないと、“Student-Centered Learning”とかイベントを軸とした授業は不安になるのはその通りだと思います。ですから、毎時間、この授業において私は何を学び取ったか、どの点が難しかったか、あるいは私はこの授業に貢献したかというようなことを、アンケート形式でとっていくことによって、生徒、学生の心の中に何がおきていて、どういう学びが生じているかということを、先生が検証することはできると思います。できればこの時代ですから、オンラインでそういう授業ページを作ってもらって、生徒がコメントを寄せるということをやっていかれると、御自身の授業を振り返ることにもなると思います。授業形態を変えると、普通の中学生、高校生はそれに「たじろぐ」わけです。それに先生がまた「たじろいで」しまうわけです。ですから授業の形態を変える場合には、当然最初の1ヶ月から3ヶ月は不安定な時期があるということを感じて始めないといけないのです。理論的なバックグラウンドや他のケースも理解した上で始めないといけません。例えば英語で授業をやり始めるとか活動中心にすると生徒は嫌がる、親からも電話が掛かってくる、「じゃあやっぱり元に戻そう」ということになってしまいます。新しい授業形態、新しい関係性を先生と生徒の間で作ろうというのには、それなりの覚悟が必要であるということです。「たじろがない」というのがキーワードです。

野山 では、一つだけお話ししたいと思います。私の資料の中にモデル図があります。モデル図のことで御質問もいただきましたけれども、一つだけこれでお話ししておきたい

と思うのは、この中には「コミュニケーション」がないのです。では、国語審議会からの答申でコミュニケーションということを重視していないのか、と思われる方がいらっしゃるかもしれないので、そのことだけ申し上げてまとめの言葉としたいと思います。コミュニケーションは、御存知の方がたくさんいらっしゃると思いますが、「伝え合う力」という言い方で、国語科教育の大きな目標になっています。これは「コミュニケーション能力」とほとんど同義で使っているのですが、この構造図、モデル図の中にある理由は、ここにある「考える力、感じる力、想像する力、話す力」、あるいはその下を支えている基盤となる国語の知識、あるいはもっと広くその下にあった、その人の教養、価値観といったものと一体になっているのです。お話をしているながら、「こんなこと聞いちゃった」、「ずいぶん嫌そうな顔をしているな」と思えば、それを自分で感じ取りながら、それを修正する方向で話をもっていくということも、場面としては出てきます。あるいは相手が言っていることをきちんと理解していく、それを考える力の中に分析力というのはあるわけですが、それによって相手が言いたい事を自分がきちんと掴んでいく。あるいは相手が言葉としては発していない言葉で、実は言いたいことってあるわけです。そのときはどうするのかと言うと、やはりそれは相手の気持ちを感じ取ったり、あるいはここで言うところの想像する力ですよね。「ボールペンを貸してあげるよ」と言いながら、「本当は貸したくないんだな」という気持ちで言う場合もあるわけです。そしたら、「いいんだよ別に貸してくれなくても」というふうに言うと、相手も安心するわけです。そういう形でここに挙がっている、「考える」とか「感じる」とか、「想像する」とか、「表す」とかいうものは、すべて複合される形でコミュニケーション力は成り立っているのです。この表の中にコミュニケーション能力のことが入っていると、却って「コミュニケーション能力って大事なのか」で終わってしまうのです。それはやはり避けないといけない。今は「伝え合う力」についても実は似たような状況が起こっているわけです。伝え合う力が大事だということで安心してしまふようなところがあります。ところが本当の意味でお互いに伝え合って、お互いの気持ちまで伝え合うということになれば、ここにある力をすべて働かせないといけないのです。さっき見たらこれがすべてなくなっていましたので非常によかったな、ここに130冊持って来たかいたががあったなと、皆さんの御協力によって1冊も残っていないようなので、ありがとうございました。ということで、答申の中ではコミュニケーション能力が非常に大事なことだということがたくさん出てきますので、そのへんも含めてお読みいただきたいと思います。

杉戸 それでは補足ということで二つ申し上げます。一つは国語研究所の図書館のことで、このパンフレットの16ページに利用規定が詳しく書かれていますので、ご覧下さい。無料です。もう一つの補足は、先ほどのコメントにつながる話ですが、先ほど、「たじろがない」とか「おたおたしない」という平たい言葉で申しました。このことは今日のお話のための資料がいろいろなところに出ていますが、例えば最初に司会者、野山さんが示されたこの資料です。この下の言語生活という四角の中の、2つのラインがあるその間の右側に「寛容性とか柔軟性の強化」とあります。これがおそらくぴったり重なることだと思います。そしてそのすぐ左下の「自尊感情」、今日も話題になりましたセルフエスティームということです。これを育むための受け手の側の寛容性、柔軟性とういうことを、私としては「たじろがない」とか「おたおたしない」という言葉で申し上げたことになっていると思います。なぜそうする必要があるのであるのかということ、先ほど申しました。そういう不思議な言葉遣い、あるいはちょっと間違っただけの言葉遣い、至らない言葉遣いの中にその話で書き手の母語、言語社会の習慣、あるいはその人の生活背景、背負った社会というものがかいまみえるとか浮き出るという可能性が多いからなのです。それが国際理解の基盤を形成するというをおこしました。先ほどはそこまで申しましたが、もうひと言補足すると、そういうことをすること、つまり言葉だけではなくて、その言葉がなぜ使われたのかを立ち止まって考えるということは、結局言葉としてだけでなく、野山さんの前の説明の資料の言語生活の広がりの中で言葉を考える。そして言葉を通じた国際理解を考えるという立場をとっていくことにつながるのです。あるいはその基盤となる考え方です。言語生活とはこういう内容が非常に豊富なもので、この中に国語力も入っています。国語力自体は氏原さんの説明の通り、非常に広範かつ分厚い概念があります。そういったものを取り込むような形で、ひと言で言えば「言語生活」という概念が必要だと考えます。これはなじみの薄い言葉かもしれませんが。私ども国語研究所では50数年前、出発時点から「言語生活」というのを看板にしてきていまして、今も変わらないと思っています。それをまずきちんととらえること、いろいろな所でいろいろな人が営んでいる言語生活の姿を、きちんととらえることからまず始めようということで、研究所の仕事は進めているわけです。今日、私がコメントをしたその学習者達が、ともすれば間違っただけ、不思議な日本語を話したときにたじろがないで、^{とうた}淘汰しないで、まずは受け止めるというのも、その人の言語生活をきちんと受け止める営みの具体的な個別的な瞬間であろうと思っています。これを大切にすること、大きな

研究なり教育の広がりの中でも、あるいはもっと小さな一つ一つの、1回1回の日常生活の中での、外国人あるいは異なる地方の日本人同士の接触の中で、異なる文化を理解する上での具体的な瞬間的な場になるのだらうと思うということを、繰り返しになりますが申し上げたかったのです。改めて、「おたおたせずに言葉の暮らしを見つめよう」ということを申し上げたいと思います。ありがとうございました。

山西 私は一つ二つのことを簡単に申し上げたいと思います。先ほど質問の中で、松本さんへのもので「英語でしかできない国際理解教育って何ですか」という、まさしくそこは私が先ほどお話ししたいろんなアプローチがある中で、言葉そのものを題材とした国際理解を作っているのは、その領域にしかできないわけです。それは日本語であっても、国語であっても、英語でもあってもしかりということです。そこらへんはこれからの国際理解教育を語っていくときに、非常に大切だろうと思います。それがまさしくその言葉を文化としてとらえながら、文化というものの非常にダイナミックスというか、その部分がある意味では気付いていくというところだろうと思います。そのことと、先ほどから言っています情緒力というところで考えてみると、私も国際理解や国際教育に関するグループ研究を大学生とともにやっています。ある研究は、方言、なまりを通しての国際理解というところをやっている大学生のグループがあります。これって言葉の持つすごく面白いところであって、方言やなまりというか、ある意味では言葉の中心にない、この部分に言葉の、いい意味での遊びというのがあります。私は関西の出身ですが、大阪に帰って関西弁を聞くと情緒的な感覚をすごく持つわけです。この部分は先ほどの情緒力を語るときにもすごく大切になってきます。これはある種の文化性ですが、そこに非常に感受性、情緒力につながっていくものです。それは方言であってもなまりであってもです。先ほどから「おたおたしない」という言葉があるのですが、私は言葉はいい意味での遊びを持っていると思います。その遊びの部分に気付いていく部分というのは、正直言うと、私は遊びの中に非常にいい意味でのクリエイティブな思想努力を感じています。あまりにも言葉にがんじがらめになって、新しいものを生み出すすき間や余裕がないと、なかなかその努力は見いだされてこないのですが、言葉の中にそういった部分を見い出していくことが文化の意味での遊びであって、それが新たな国際理解であるとか、平和な文化を作り出す一つの共通性が生み出されていくわけで、あらためて言葉がそういったところを持っているなという気がしました。言葉の専門家はたくさんおいでるから、そこに入るのは遠慮しながら、「皆さん頑張って下さい」と言っているのです

が、どうにか私も関わらせていただきながら、何かできたらいいなと思っています。以上です。

野山 ありがとうございます。今回こういう企画をするときに、「言語生活」というのは非常に重要な言葉として最初から概念としてありました。一方でこの3日間を振り返ると、「国際理解教育は最終的に何のためにあるのか」という話を山西さんがしたときに、「最終目標は平和の実現である」ということをおっしゃっていました。昔、UNESCOができたときに、「心の中に平和のとりでを築かないといけない」という言葉があったように、先ほど「人間の言葉、言語能力の限界が思考能力の限界」ということを言いました。言葉で考えていることの中に、自分に自信もなく、夢もない状況を作らないようにするためにどうしたらいいのかということが、とても重要だと思います。そのためには、杉戸さんが何度かおっしゃったような、「おたおたしない」という気持ちを作るための工夫が当然必要です。さっき私はバフウチンと言ったと思いますが、あれはバフチンの間違いです。そのミハイル・バフチンという言語関係の学者というか、哲学者が「言葉を学ぶとか発するということはどういうことか」ということで定義している、いい言葉があります。それは「私というものはどういう人間で、どんな状況にあって、何を目指していて、何を必要としていて、どんなことを考えているのか、あるいはどんなことを感じているのか。そういうことに根ざして誰か具体的な相手に対して必然的なリアルな関係を……」。

<録音中断・終了>